

雨飾山

山口耀久



山には、一度登ればもういいという山と、季節なりコースなりを変えてもう一度登ってみたくなる山とがある。人によって好みは違うが、後者のほうがその人にとっていい山であることは言うまでもなく、私の場合、雨飾山はその後者にはいる。私はコースを変えて秋と春の二回この山に登った。

一度目は十月のなかば新潟県側の梶山新湯から登って、長野県側の小谷温泉に下った。泊り場の梶山新湯へは、根知からバスで山口まで行き、そこから山あいの里道を歩くことになる。こちら側から眺める雨飾山は、変哲もない山の稜線の上にチョコンとちっちゃな頂上を載せただけの姿で、さっぱり見映えがしない。それにくらべると、谷間の左手に迫った駒ヶ岳と鬼ヶ面山は、立派な岩壁に鑿よろわれた厳しい山で、こちらのほうがよほど見応えがある。

梶山新湯からいよいよ山道が始まるのだが、この樹林帯の登りは結構きつく、おまけに変化がなくて、あまりおもしろくない。けれども登り着いた笹平は、名前のおおりの平坦な稜線の笹原で気分がよく、その端に砦のように盛りあがった岩の頂上に登

ると、そこはぐるりと山ばかりの見事な展望がひらけている。そして、こののびやかな笹平と、岩の物見台である頂上の組合せで、なるほど雨飾山は「名山」なのだとな納得がいく。

だがそれだけのことだったら、私はこの山に二度登りたいとは思わなかっただろう。稜線から長野県側において、下の荒菅沢の河原に着いたとき、そこでふり返った雨飾山が素晴らしかった。色あざやかな紅葉に埋まった谷の奥に、フトンビシと呼ばれる巨大な岩壁を張りめぐらした山の姿は、まさに豪勢な屏風絵といってよかった。ここではこちら側から、この沢をつめて、もう一度あの頂上に立ちたいと思った。

再訪は翌年の五月になった。前回の秋の一人旅はさびしかったので、こんどは四人の仲間を誘って出かけた。小谷温泉に着いて麓の鎌池などに遊んだ翌日、ミズバシヨウの咲く大海川の川筋をつたい、新緑のブナ林の中を歩いて、荒菅沢の雪の広場に着くと、そこに期待したとおりの勇壮な景観が待っていた。紅葉に彩られた秋の大屏風は、真っ白な残雪と暗灰色の壁で構成された若々しいそれに色彩を変えて、山の上の

青空はこの上なく明るかった。

登山路に登る二人の仲間と、頂上でまた会うことにしてそこで別れ、私はべつの二人と荒菅沢に入った。狭い咽喉ゴルジュになった入口は完全に雪の下に埋まって、広い雪溪の上には上から落ちてきた巨大なブロックがごろごろしている。雪溪は、左右に仰ぐ岩壁の裾をせりあがって、スリップしたらピッケルで止めるのもむずかしいような急斜面になったが、三人がロープで結び合うこともなく、それぞれがアイゼンを利かして順調に登高して、稜線に出た。

笹平は、まだら状にあちこちが雪田になっていた。意外なことに、ハクサンイチゲがもうふくらんだ白い蕾を開きかけていた。そしてもっと意外だったのは、こんな高所なのにカタクリが到るところに咲いていたことだ。

頂上の展望は、前回のときにも増して見事だった。周りの山々はまぶしい太陽の下で残雪の肌を輝かせていたし、海谷の山々のむこうには日本海がすぐ近くに見えた。

—— 荒菅沢の雪溪の登高も、笹平の花たちも、そして頂上の展望も、なにもかも
最上の雨飾山の再訪登山だった。雨飾山に登るなら五月がいちばんだと、このとき以
来、私はそう勝手に信じている。